双ケ丘中だより

京都市立双ケ丘中学校　6/15　第８号　文責　林

学校教育目標　「自らの未来を切り拓く，心豊かな生徒を育成する」

修学旅行を終えて（その２）

３年生は，修学旅行で５月３１日（火）から６月２日（木）まで２泊３日で沖縄を訪れました。遅くなりましたが，３年生の修学旅行を終えての感想を引き続き紹介します

あっという間に過ぎていった３日間。この３日間は中学校生活で一番といっていいほどの充実した想い出に残る３日間でした。

その中で，私の心に一番残ったのは修学旅行の大きなイベントの一つである「民泊」です。この民泊では，民家の方々の優しさにふれることができたり，普段では分からない友達の新しい一面を発見できました。伊江島のおじいとおばあはとても楽しく，優しく，何よりあたたかさがありました。初め，船に乗り波風を受けながら島に着いた時，「どんな方なんだろう」「ちゃんとお話できるかな」など，楽しみにしていたものの少しの不安や心配がありました。しかし，そんな不安や心配はすぐになくなりました。はすくにホールに着くとすぐおばあは声をかけてくださり，私の緊張をほぐしてくれました。それからおばあの家に着くと沖縄名物のサンピン茶やシークワァーサーのジュース。そしておばあ特製サータアンダギーを用意してくださいました。それらを食べながらおじい，おばあと少し話すと「島をぐるっとまわってみようか」とドライブにつれていってくれました。そこで伊江島のすばらしい自然を車の中でもたくさん感じました。家に帰ってからおいしいご飯，その後には貝がらの写真たて作りなど想い出の一ページをつくることができました。翌日には，私たちが行きたいと言ったところ全てに連れて行ってくださいました。島のシンボルの城山，伊江の海，ハイビスカス園やお土産屋さんなど伊江島の良い所を少しの時間でしたが存分に楽しむことができました。

どんな時にもおじい，おばあは私達のことを一番に思ってくれました。一つ一つの行動に優しさや思いやり，あたたかさがあり本当の家族のようでした。修学旅行の「民泊」で学んだ人と人との関わりを大切にしてこれから，あたたかい優しさをもてるような人になりたいです。

修学旅行へ行って，学んだことは，たくさんある。修学旅行に行く前の不安と楽しみの気持ちは，すぐに消えていった。

僕が学んだことの一つ目は，自然の美しさである。今まで，べつに自然に興味があったわけでも興味がなかったというわけでもない。自然の景色へは，とくに関心というものはなかったけど，沖縄の自然の景色を見て，とても感動した。なぜ沖縄の自然は他の都市と比べ美しいのかなと疑問に思った。それは多分，沖縄の人々は自然が好きだったり，自然は自分達の気を落ち着かせるようなものだから大切にできるのだろう。僕も，沖縄の人々みたいに自然をもっと大切にしたい。

もう一つ学んだことは，自分の家族についてである。民泊は，今までの小学校の民宿学習とは違って，学ぶことや感動がいくつかあった。僕達の民泊のお父さんは，見た目がものすごく怖かった。初めて見た時，本当に頭の中が不安でいっぱいだった。「よろしくな。それとも先生のところ，帰るか。」最初の会話はこんな感じでぞくぞくしながら車へ荷物をつみ，車の乗るとドアがかたく，なかなか閉められなかった。するとお父さんが「力いっぱい閉めてええぞ。ドアがこわれたら，また直せばいいだけやで。」と言ってくれた。この言葉から民泊が楽しいと思えるようになった。また，この人はやさしいお父さんだなと思えた。お母さんは，飯がとてもおいしくて，嫌いなトマトでさえ食べられた。しかし，量がとてつもなく多かった。今思うと，中学３年生は育ちざかりだから，量を多くしてちゃんと大きくなってほしいという気持ちが込められているような気がした。普段気づかない大切なことを民泊で，知った。今日の夕飯だって自分のために一生懸命，自分の時間をさいて作ってくれているなんて考えながらご飯を食べたことがない。ご飯だけでなく，自分が支えられていることに対し，当たり前と思ってはいけない，感謝しようと思った。